

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

—— コンビニに行こうとの「ット」は何を表すのか ——

池 谷 知 子

1 問題の所在

本稿では「もう帰ろうっと」「よいしょっと」のように文末に付き、促音を伴った「ト」である「ット」という形式の機能と表現性について論じる。これらの形式は主に話し言葉のみに現れ、書き言葉に現れないため、今までほとんど光が当てられることがなかった。この「ット」と似た形式として引用・伝聞を表す「お母さんも行くって」の「ッテ」や、記憶の確認を述べる「誕生日何日だっけ」の「ッケ」のようなものがあるが、これらの形式に比べて「ット」は先行研究がほとんど存在しない。従来の研究では引用形式である「ト思う」の省略形だとされることが多かった「ット」であるが、本稿では「ット」は引用形式というより、むしろ、終助詞的モダリティ要素であることを証明する。そして、「ット」の表現性が、その原義である補文マーカーとしての機能である括弧に入れる操作と、invisible listener（目に見えない聞き手）から生まれることを論じる。

2 問題の所在

アルクの出している『日本人で知らない・外国人の大疑問』という本の中に、次のような文末に付く「ット」についての疑問がある。

この本は漫画形式になっているので、3人の登場人物を仮にA、B、Cとしておく。質問者であるAは日本語非母語話者で、聞き手であるBとC

文林 四十五号

は日本語母語話者である。

外国人の疑問③

A：コンビニにこういうの「と」って何ですか？

B & C：と？

A：そうですとです。

B：えー、文法的に言えば…

C：え！？文法的に説明できるの？

B：こういうときの「と」の後ろには「コンビニに行こう（と思う）」が隠されています。いわゆる、引用の「と」です。

『日本人で知らない・外国人の大疑問』pp. 20-21



このように、ここでは文末の「と」は「と思う」の述部「思う」が省略されたものだと解説されている。

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

しかし、この解釈には2つの問題点がある。

問題1 なぜ、話し手の意志的発話に引用形式の「ット」が付くのか。

問題2 「ット」は本当に「ト思う」が省略されたものなのか。

先の例ならば、「コンビニに行こう」と意向形で発話しても十分であって、わざわざ「ット」を付けなければならないわけではない。また、独り言的に話し手の意志的行動を述べるのに「と思う」という、話し手にとって断定できない思考であるというマーカを付けるという点でも矛盾している。なぜなら、話し手が次の自分が行う行動はほぼ100%コントロール可能なものであって、確信度や実現度の高いものであるからだ。

本研究では、「コンビニに行こうっと」のように、引用形式といわれている「ト」の前に促音が付いて「ット」となり、文が終わるものを考察の対象とする。

3 先行研究

3.1 加藤（2010）

「ッテ」や「ッケ」についての文献と比較して、「ット」を取り扱った文献は少ない。そのような中で引用形式の「ト」と「ッテ」を詳しく分析したものとして加藤（2010）の研究がある。加藤（2010）は主に次のような「ト」を分析の対象としている。実例を見てみよう。

私の一番、役割は、行政改革をとにかくしっかりやるということではなかろうかと思っています。総理からも近いうちに総理直

文林 四十五号

属のえーこの行政改革の機関を設けると、その時には是非ひとつ、
えー私の代理としてえーよろしくというお話もありました。

（「NHK ニュース」第二次橋本内閣閣僚インタビューより

話し手：当時の総務庁長官1996. 11. 7）

加藤（2010：1）

これに対して加藤（2010）は次のように述べている。

前掲の例のように、話し言葉の談話には、書き言葉に見られない、
引用の諸形式（「AはBに～と言う」、「Aは～と思う」及び、連
体修飾節において、修飾部と主名詞をつなぐ「トイウ」）等基礎
とした様々な表現が出現する。それらは引用形式「ト」以降がす
べて脱落したものであったり、また、メタ発話的に発話を引用す
るものであったりする。これらは断片的な単位を連ねて全体の叙
述を完成していくという特徴を持った話し言葉の諸形態（会話・
独話・独り言）によく観察されるもので、引用の形式を基礎とし
ていながら、談話の様々な位置に現れ、それぞれ独自の意味・機
能を有する興味深い存在である。

加藤（2010：2）下線は筆者

加藤（2010）でも「ト」は「と思う」「と言う」「という」などの形式が
省略されたものとされている。加藤（2010）は「ット」を「ト」のバリエー
ションの1つとしてとらえており、その違いを特に区別していない。先に
あげた加藤（2010）のインタビューの例は「という」の省略であるが、大

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

島（2010）の例から「と思う」が省略されたものをあげる。

（大島2010：92 例文（30）より 下線は筆者）

あのう、御手洗さんのような方なら、どんな相談にものってくださると思っ
てうかがいました。[どんな些細な事柄でも、一般と変わっていることな
ら興味をお持ちになるんじゃないか] と…。

下線部の「ト」以下には「思うんです」のように述語「思う」が省略さ
れている。しかし、これらの「ト」は、そこで文が終わりながらも、「ット」
では言い換えることができない。このようなトは、本稿では取り扱わない。

しかし、一方で「ト」と「ット」が言い換えられるものもある。それを
次節3. 2節で確認する。

3. 2 国立国語研究所（1963）

少し古い研究になるが、国立国語研究所（1963）が独話資料を分析した
「ト」の用法である。その中で「ト」の用法として、以下の3つがあると
している。

①引用提示句

②引用文切れ

③ト終止文

この中で「ット」と関係があるのは3つ目の「ト終止文」だけなので、
その部分だけ引用すると、この「ト終止文」は「不整・誤用から出たこ
とは明らかだが、今日すでに慣用形式と認めることが適当と思われる類」
であると述べられており、引用の「ト」というよりも「終助詞」として解

文林 四十五号

釈すべきものであると述べられている。

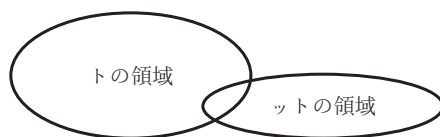
その例として次のようなものが上げられている。(1963: 27)

- (1) 第一番目ニハ コノ オー 中南米ノ 経済構造ト イウ モノガ
アメリカト クラベルト タイヘン違イガ アルト。
- (2) コレデヨシト
- (3) モウヤメトコウト

(2) と (3) に関しては、(1) よりも更に終助詞的性質が進んだものとして同じグループに入れられている。しかし、(1) と (2) (3) は少し性質が異なる。これらの例を「ット」で言い換えてみると次のような結果になる。

- (4) *第一番目ニハ コノ オー 中南米ノ 経済構造ト イウ モノ
ガ アメリカト クラベルト タイヘン違イガ アルット。
- (5) コレデヨシット
- (6) モウヤメトコウット

つまり、「ト」と「ット」は全くの同義でなく、「ット」は「ト」は明らかに異なった表現性を持つ。しかし、一方で「ト」と「ット」が言い換えられるものも存在している。イメージ化するとこのようになるであろう。



引用形式をとった話し言葉のモダリティ

4 本研究で取り扱う「ット」

本研究では「ト」と「ット」を区別し、文末の「ット」に的を絞って考察する。もちろん、これは「ト」と「ット」の関係性を否定するものではない。これまで言われているように「ット」は「ト」から派生してものである可能性が高いが、文法化が進み促音を伴う「ット」として定着した用法は、むしろ積極的に「ト」と異なる「ット」同時の意味領域を持つと考える。つまり、「ト」でも「ット」でもどちらでも構わないような、促音はオプション的なものではなく、積極的に「ット」でなければならない領域があるとする。本稿で取り扱う「ット」は以下のようなものである。

- 「ット」という形式を持つもの。あるいは「ト」でマークされていても、「ット」で完全に言い換えられるもの。
- 「ット」で文が終わり、それ以上、どのような要素にもかかっていないもの。
- 「～と思う」「～という」などの省略と解釈できないもの。

考察の対象にする例として「コンビニに行こうっと」「もう寝ようっと」「よっこいしょっと」「あらよっと」などを想定する。

それでは、これらがどのような機能を持ち、どのような表現効果を持つのかを考察していく。

5 終助詞としての「ット」

文末の「ット」を終助詞的な一種のモダリティ要素と考える方向性は別に目新しいものではない。3.2節の先行研究であげた国立国語研究所

文林 四十五号

(1963)の中でもある種の「ト（ット）」は終助詞的なものであると述べられているし、更に、はっきりと「ト（ット）」の終助詞性を打ち出したものとしては Okamoto (1995) がある。Okamoto (1995) では「ノ」「コト」「ト」「ッテ」のように、complementizer と呼ばれる補文マーカーを持つ文を一括して論じており、これらが終助詞として、話し手の内面的心情を表すモダリティとして機能していることを主張している。Okamoto (1995) も「ト」の中に「ット」もまとめて分析している。

Okamoto (1995: 224) の主張の要点をまとめると以下ようになる。「ト」はインフォーマルなスピーチで使われ、話者の自己確認を表す独話（独り言）に使われるとし、以下の3つの用法があるとしている。

- (a) 挑戦 「何だと。つまらないだと。」
- (b) 自己確認 「あれはもうやったと。」
- (c) くだけた宣言 「もうねようっと。」「ぼく、知らないっと。」

「ト」は自己確認を表すことができるが、話し手の直接的な感情を述べることができない。そのため、「*ああ、疲れたと」は許容できないとしている。そして、特に (c) について、宣言としての話し手の考えや独話を表すとしている。そして、「ット」と「ヨ」を比較して、その違いは聞き手との話し手の関係だとしている。

- (7) ぼく、知らないっと（聞き手が何を考えているのかに無関心）
- (8) ぼく、知らないよ（聞き手が知っていると思っている）

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

また、Okamoto (1995) では「パラフレーズ可能性 (paraphrasability)」と「意味の推測可能性 (inferability of meaning)」という 2 つの語用論的性質から「ト」「ッテ」「ット」には補文マーカーとして働くものと終助詞として働くものがあることを述べている。そして、さらに、統語的観点からもいくつかの所見を述べている。

Okamoto (1995) は「ット」だけ扱っているわけではないので、Okamoto (1995) の論旨に補足しながら「ット」が終助詞であることを確認していく。

5. 1 語用論的性質 1 : パラフレーズ可能性

Okamoto (1995) では、「ト」「ッテ」「ット」の後ろに該当する述語を補っても、元の文が表す意味を維持できないものは終助詞であるとしている。その例として「何だと？」をあげている。これに「何だと言った？」と述語を補ったら、Okamoto (1995) が述べている (a) 挑戦のニュアンスがなくなってしまう。つまり、「ト」で終わることが大いに文の意味に関係しているのである。

これを「ット」にあてはめてみることにする。「ぼく、知らないっと」と「ぼく、知らないと思う」を比較してみると、「ぼく、知らないっと」の持つ、やや無責任で傍観者的な発言のニュアンスを「ぼく、知らないと思う」は維持することができない。

5. 2 語用論的性質 2 : 意味の推測可能性

これは、補文マーカーとしての意味を知っていても、終助詞的な意味を知らなければ、意味解釈を間違ってしまうということを述べている。つま

文林 四十五号

り、「何だと」という文末の「ト」が「(a) 挑戦」という意味を持つことを知らない、「何だと」を普通の引用文として解釈してしまうことを指している。つまり、意味の推測可能性があれば、それは補文マーカーであって、それが不可能ならば、終助詞ということになる。

5. 3 統語的性質：交換可能性

Okamoto (1995) では「ト」「ッテ」「ット」が統語的に終助詞であることを表す根拠として、補文マーカーとして働くものは、形式の異なる他の補文マーカーと交換可能であるが、終助詞になったものは交換が不可能だとしている。補文マーカーである「ト」は同じ補文マーカーである「ッテ」と交換が可能であるが、それが話者の自己確認というモダリティ的性質を持つと交換が不可能になる。

(9) これでよし ト／ッテ 言った。(補文マーカー)

(10) これでよし ト。／＊ッテ。(終助詞 (b) 自己確認)

それでは、これと並行的に「ット」で考えてみることにする。

(11) 「よいしょ」 ット／ト／ッテ 言った。(補文マーカー)

(12) 「もう寝よう」 ット／ト／ッテ 言った (補文マーカー)

(13) よいしょ ット／＊ト／＊ッテ (終助詞)

(12) もう寝よう ット／＊ト／＊ッテ (終助詞)

補文マーカーとしての「ト」と終助詞としての「ット」の違いを語用論

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

の性質と統語論的性質にわけて整理すると図1のようになる。

図1 終助詞としての「ッ」の性質

	補文マーカー	終助詞
語用論的性質1：パラフレーズ可能性	○	×
語用論的性質2：意味の推測可能性	○	×
統語論的性質：交換可能性	○	×

これらの結果からも「ッ」は補文マーカーではなく。終助詞と認めることができるだろう。

6 終助詞「ッ」のモダリティ的意味

確かに「もう知らないっ」「コンビニに行こうっ」や「もう寝ようっ」とのような例は「ト」では言い換えることができない「ッ」独自の意味領域である。これらの例は、Okamoto (1995) では、話者の心内に浮かんだ感情や意志を独話的に表出し、聞き手を想定していないため「くだけた宣言 (casual declaration)」とネーミングされている。もちろん、「コンビニに行こうっ」や「もう寝ようっ」のように次の行う予定の話し手の意志的な行動ならば、確かに「宣言」という用法はふさわしい。「もう知らないっ」のような個人の感情や意見の表明も「宣言」の一種に含めることができるだろう。

しかし、「くだけた宣言」の中に「よいしょっ」「どっこいしょっ」「あらよっ」とのような例を入れることは難しい。なぜなら、これらのものは、かけ声的なものであり、その発話情報はゼロだからだ。もちろん、

文林 四十五号

これらの用法を別物として考えることも可能である。しかし、本稿では invisible listener（目に見えない聞き手）という概念を元に包括的に説明してみたい。invisible listener については8節で詳しく説明する。

「ット」については加藤（2010）において、次の図のように体系づけている。

図2 各分類と代用的な引用標識の形態加藤（2010：69）

大分類	下位分類の名称	代表的な形態
A	終止系・後続部省略系・引用部系列系	ト
B	帰結確認用法・帰結述べ立て用法	ト
	精緻化情報確認用法	ッテ
C	言明用法・理解困難表示用法・意外感表示用法	ッテ
D	伝言取り次ぎ用法・伝聞情報表示用法	ッテ
E	自己演出用法	ッテ
	発言の力軽減用法・自己確認納得用法・認知境界表示用法	（ッ）ト

この中で「ット」と関係があるのは、（E）の発言の力軽減用法・自己確認納得用法・認知境界表示用法を表すものである。加藤（2010：67）では（A）が「引用の基本型」とし、（E）の特徴として、「話者が、自分が発話していることに対する意識を表示するものである」と述べている。

加藤（2010）では（E）について次のように述べている。

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

本章で述べる「発話意識の表明により、発話境界を用字する用法」は、引用部をメタ言語的に、かつ、発話のまさにその時点で作られた引用部を引用（「リアルタイムの引用」）することにより、話者の「発話している」という意識を表明し、情報の境界を標示するものである。発話の境界を明確に示すことで、現在発話している「今、ここ」の場以外の場（二重の場、砂川 1988 参照）の存在を示し、聞き手に発語の力を軽減した形で伝達したり、自己の思考の認知的な区切れ目を表示したりすることができる。発話の力軽減用法・自己演出用法・自己確認納得用法・認知境界表示用法の4用法がこれに当たる。

また、加藤（2010）は聞き手の有無の観点からさらに2つに分類している。加藤の主張を図にまとめると次のようになる。加藤は（2010）は「ッテ」「ト」「ット」の3つの用法の分布を論じているが、ここではわかりやすいように特に「ット」のカバーしている用法を太枠で囲んでいる。

図3（E）の分類とその用例 加藤（2010）を筆者がまとめたもの

聞き手有 （発話の意識有）	㊸発話の力軽減用法 はいはいと	㊹自己演出用法 ほら、バイバイって
聞き手無＝独話 （発話の意識無）	㊺自己確認納得用法 これでよしと もう帰りましょうと	㊻認知境界表示用法 さてと どっこいしょと

文林 四十五号

それでは、Okamoto (1995) で述べられている「くだけた宣言 (casual declaration)」という用法と、この加藤 (2010) の④発話の力軽減用法、⑤自己確認納得用法、⑥認知境界表示用法とはどのような関係になるのか考えてみたい。

6. 1 ④発話の力軽減用法

加藤 (2010) の中で、この用法について、自己の発話を実時間に引用することで、聞き手に「私が今ここで行っている発話を額面道理に受け取って欲しくない」ということを伝達するものだとしている。

それを証明する例として、次のような「ット」が付加されたものと、ないものとのペアを作り、それらの表現性の違いを比較している。

(番号は本稿の通し番号に直してある)

(13) A : 知っているなら、教えてくれよ。頼むよ。

B : (1 a) 知らないよ。

(1 b) 知らないよと。

(14) A : 本当に手伝ってくれるの？

B : (2 a) はい、はい、手伝いますよ。

(2 b) はい、はいと。手伝いますよ。

加藤 (2010) は「ット」が付いた b の方が、相手の発言に対して親身になって答えていない、突き放した感じがすることを指摘し、「ココデハ知らないト言オウ」「はいト言ッテオコウ」のように、話し手の発話に対する意識が表出されることになり、このことが「話者が意識的にそう答え

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

ているのであって、本心は異なるかもしれない（pp.158–160）」という解釈を生むとしている。

これらのことから、「知らない」「はい」という断定の効力が軽減されているため、発話の力軽減用法としている。つまり、「引用内容は話者の本心と異なる者で、演技として作られたもの」ということを聞き手に示すものだとしている。

先に見た Okamoto (1995) では「ット」は宣言であり、聞き手のことを斟酌しない用法であることが述べられていたが、加藤 (2010) で示されたこの用法は「聞き手」というものが強く意識されていると解釈されている点で大きく異なる。

6. 2 ⑥自己確認納得用法

加藤 (2010: 164) はこの用法は話し手の認知や思考の境界を表す機能を果たすものであり、周りの文脈とは関連を持たない局所的な環境で出現するとしている。つまり、「独り言」のように聞き手の存在を前提としないタイプの談話で現れるとしている。このタイプには「ト」と「ット」の両形態あり、下降イントネーションで発話される。その「ト」や「ット」に前節する引用部は比較的短いもので、発話者自身が引用部の発話を完了したことを確認し、納得していることを表すとしている。

加藤 (2010) があげている例を引用する。

(15) (仕事が一段落付いた際に)

これでよしと。

(16) 男：僕は一コーヒーに砂糖を1つ入れますっと。甘くなりますよー。

文林 四十五号

<コーヒーをすすするような音>

あー、うーん、いい。おいしくなった。

（「絵とタスクで学ぶ日本語」テープ タスク12－2．8）

（17） 今、8時3分になりましたと。

「ト」と「ット」の例が混じっているが、「ト」で表されている（15）や（17）を言い換えて（15）’「これでよしと」（17）’「今、8時3分になりましたと」のように言うことも可能である。また、実際の発話では「これでよし…と」「これでよしと」のように、ポーズが入るかもしれないが、書き言葉として表記する際には、あまりにも話し言葉的であるので、表記としてポーズや促音が現れにくい可能性もある。

加藤（2010）の⑩自己確認用法のまとめとして、何かが完了したことを確認し、納得した用法ということが出来る。

6. 3 ⑩認知境界表示用法

最後に⑩認知境界表示用法をまとめてみる。加藤（2010）から当該の部分を引用する。

加藤（2010：167）

本節で述べる「認知境界用法」の「ト」は特に聞き手との相互作用を前提とせず、単位話者自身の思考の区切りを表す認知的なものである。この点で前節の「自己確認納得用法」と同様であるが、認知境界表示用法の「ト」は、言語化した引用部を意識的に確認するのではなく、「刺激に反応してとっさに声を出した状態から我に返った」という認知状態を標識するものである。それは、本用

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

法の引用部が、話者の無意識的に発したかけ声や叫び声であるという点に特徴づけられている。引用部がそのような特徴を持つものであるため、引用部に確認の意味を込めて「ト」を付ける「自己確認納得用法」とは違い生産性は低く、引用部はバラエティーが少ない限定的なものとなる。(13)～(15)(本稿では(18)～(20))は、行為の開始に当たって、或いは行為を行うのと同時に出てくるかけ声に「ト」が付いたものである。

(括弧は筆者)

それでは、加藤(2010:167)であげられている例をみってみる。

- (18) (子供を朝学校に送り出してから、母が朝食で使った皿などの洗い物を目の前にして) さてと。まず、洗おっか。
- (19) (中華鍋に入ったチャーハンを空中でひっくり返しながら) あらよと。
- (20) (痛いひざをかばいながら立ち上がって) どっこいしょと。

また、行為の開始とは関係がない真に無意識的な発話にも付くことができるとして、以下の例をあげている。

- (21) <W杯の出場をかけたサッカーの日本対ウズベキスタン戦の場面>
(走って生きた選手Bがスライディングをしてボールを入れようとしたが届かず、ボールがタッチラインを割ってしまう) あーと。

そして、これらは「無意識的かつ、反射的な驚きの感情が言語表現として表れた後、それを意識的に捉えて我に返る」という話者の認知的な状態を

文林 四十五号

表すとしている。

加藤（2010）主張はよくわかる反面、加藤自身も述べて言うことであるが、「無意識で反射的な感情＋我に返る」という心理的シーケンスをとっていたとしても、この種のは生産性が低いため、自由に述べることをできないという矛盾がある。部屋の隅で黒い影を見て、瞬間的にゴキブリかと思って「きゃー」と叫んだとしよう。しかし、よく見たら目の錯覚だったと我に返ったとしても、「*きゃーっと」と言うことはできない。

つまり、加藤（2010）の説明では、それぞれの例を分析することはできるが、それをもって、「ット」の用法を予測することが難しいのである。

つまり、加藤（2010）の説明は「ット」の必要条件ではあるが、十分条件ではないのである。

7 「ット」の表現性

これまで様々な論を見てきたが、「ット」が聞き手を意識しているのか、意識していないのかという点から考えていきたい。

問題の出発点に戻って、「コンビニに行こうっと」の「ット」はどちらなのだろうか。これには先行研究でみた2つの考え方がある。1つは、「くだけた宣言」としている Okamoto（1995）の分析で、それは聞き手を考慮していない一方的な「宣言」と解釈している。もう1つは、加藤（2010）の分析で、「知らないっと」のような例は、発話の力を軽減した形で聞き手に伝達する「@発話の力軽減用法」として解釈している。つまり、聞き手を意識していないという意見と、聞き手を意識しているという2つの考え方がある。これをどう考えたらよいだろうか。

加藤（2010）の述べる聞き手に対する「発話の力軽減」とは、「コンビニ

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

に行こう」と比べて、「コンビニに行こうっと」の方が軽い感じがし、それが「話者の本心ではなく、演技として言っている」ということを意味している。

本稿では「ット」は補文マーカー「ト」からの終助詞化される過程で文法化され、意味の漂白（ブリーチング）が行われ、かつ、新たなモダリティ的表現性を獲得しているのではと考える。しかし、元の補文マーカーとしての機能の名残を残していると考え、そこから「ット」の意味機能を説明していきたい。

まず、「ット」はその起源である補文マーカーとして機能から、何かを「 」(括弧)、つまり補文に入れたような効果があるとする。つまり、ある物事ないし発話の始まりと終わりをマークする役目である。

ある言葉を括弧に入れることにより様々な意味が出ることが知られている。英語の Air Quotes（エアクオート）と呼ばれるボディーランゲージは、人差し指と中指でVサインを作り、その両指を同時に曲げる動作を繰り返すジェスチャーで、その当該発話が引用であることを表す。

しかし、普通の発話の一部に Air Quotes が付くと、コンテキストによって様々な意味になる。例として日本語で考えてみよう。

「彼は“ともだち”よ」と言った場合、色々な解釈が成り立つ。

まず、彼は本当の友達ではないから括弧付きにしている場合もあるだろう。逆に、彼は敵ではなく、大切な友達であることを強調したい場合もあるだろう。「それはいい“ともだち”だね。」と言った場合、文字通り受け取ることもできるが、口調やコンテキストによっては皮肉にもなる。このように、発話を括弧に入れるだけで、その発話が部分的に取り立てられることになり、時と状況に応じて様々な解釈が可能になるのである。

文林 四十五号

本稿では「ット」も一種の括弧付き表現であることのマーカーとして機能すると考える。しかし、モダリティ化して終助詞になっているため、いわゆる統語的な補文マーカーとは異なる制限が色々働く。

砂川（1987）が述べているように補文マーカーのもつ引用形式は「場の二重性」を持つ。「二重性」とは、引用された話者Aのオリジナルの句が発話された場1と、それを話者Bが話者Cに伝える場2という2つの場があるということである。そして、2つの場には通常、タイムラグがある。それに対して、しかし、「ット」は「知らないって」「コンビニに行こうって」「よいしょって」を見てもわかるように、加藤（2010）の言うようなリアルタイムの話し手の心理状態の実況中継である。引用とは誰か他人のものを引用することが基本である。もちろん、自己の発話の引用も可能ではあるが、それは「過去」という時間的な隔たりがあるため、オリジナルの発話と、現在の発話という「場の二重性」が保たれるからである。それに対して、「ット」はリアルタイムの引用であって、かつ独話的であるため、普通の引用の定義を大きく外れている。

図4 補文マーカーとしての引用形式と「ット」の違い

	補文としての引用	ット
聞き手	○	?
場の二重性	○	×

それでは、話し手は誰に自分の心理状態を実況中継しているのだろうか。ラジオのDJや、スポーツ中継のアナウンサーなど、目の前に実際の聞き手がいなくても、話し手が自分の気持ちを語る可能性はある。しかし、こ

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

れは不特定であるが、誰かが聞いている（たとえ、リアルタイムでなくても誰かがいつか聞く可能性がある）という話者の意識が前提となっているため、聞き手が存在すると言ってもいいだろう。それでは、「コンビニに行こうと」は誰かに対する発話なのだろうか。それとも、自分自身に対する「大きな独り言」なのだろうか。

本研究では「ット」を「コンビニに行こうと」型と「どっこいしょと」型に分けて議論する。まず、最初に「コンビニに行こうと」型を論じ、次に「どっこいしょと」型を議論する。

8 「コンビニに行こうと」型の表現性

聞き手がいるのかいないのか、はっきりしない「コンビニに行こうと」型の表現性を説明するために invisible listener（目に見えない聞き手）という概念を新たに設定する。invisible listener は文字通り目に見えないので、その場にいてもいなくても構わない。また、話し手から聞き手への働きかけがあるわけでもなく、まるで透明人間のような聞き手を指す。

何故、このような、いてもいなくてもいいような invisible listener という概念を設定するのか理由を述べる。まず、「知らない」とを例にとって考えてみる。これは、加藤（2010）が述べたように、「知っているなら教えてくれよ。頼むよ。」という問いかけに対して「知らない」と答えることができる。しかし、これ以外にも、学校から帰ってきたら、飼犬が母親のお気に入り革靴を噛んでぼろぼろにしているのを発見した息子が「知らない」と言う状況でも使用できる。この時、息子は犬に向かって話しかけているわけではない。犬に直接話しかけるなら、「知らないよ。おまえ」のように働きかけのある終助詞を使うだろう。この時、息子は後

文林 四十五号

から起こるであろう出来事を想像して、invisible listener につぶやくという方法で、今、自分が遭遇しているまずい状況を客観的に捕らえ直しているのである。この時の invisible listener は、独話の相手としての自分自身であってもいいし、その場にいないが状況の被害を被る母親でもいいし、偶然にそれを見ている通りすがりの人でもかまわない。そのように、特定の個人ではなく、アノニマスでありながらもその状況を分かち合っている聞き手のことを invisible listener と規定する。「ット」が独話的でありながらも、かつ、聞き手に対するコミュニケーション機能を持つのはこのためである。

つまり、「ット」は実際に聞き手がいるかどうかは関係なく、聞き手を invisible listener として不可視化したものとして発話する。現実に関き手が存在しているのに、相手を見えないものとして扱うのは、コミュニケーション上かなり失礼なことである。そのため、質問されているのに、「はいはい」とのように「ット」で答えるとかなり失礼で突き放した語用論的效果が生まれる。

この「はいはい」という「はい」二回繰り返して了解を表す形式も、相手を軽んじている言語形式である。そのため、(22) のように一回の「はい」についた「*はいっと」は成立しない。

(22) A：私、この仕事明日までにやっておいてね。

B：(1 a) *はいっと。

：(1 b) はいはいっと。

また、Yes-No 疑問文の答えとなる「はい」にも、「ット」がつくこと

引用形式をとった話し言葉のモダリティ
 ができない。「ット」には引用文のもつ「場の二重性」という間接性が残っている。そのため、(23) のように直接的な返事を要求されている Yes-No 疑問文の真偽判定の「はい」とは共起できない。

(23) A：あなたは大学生ですか？

B：(1 a) *はいっと。

(1 b) *はいはいっと。

反対に、現実には聞き手がいるのにも関わらず「ット」で相手を不可視化することで、独特の表現効果を出すこともできる。

(24) A：私、太郎と結婚しようと思うんです。

B：(1 a) そりゃ、よかったねっと。

(1 b) あ～あ、ついにやっちゃったねっと。

(1 a) の「よかったね」は、本来は肯定的な発話であるはずだが、「ット」が付くととたんにアイロニー的になる。なぜなら、「よかったね」のように、相手に働きかけのある形式を積極的に選択せずに、そのくせ、肯定的なコメントに「よかったねっと」と「ット」を付けることが、茶化したり皮肉めいた効果を生むからである。

目の前に、存在している聞き手をいないものとして、話し手のリアルタイムの心の声だというマーカー「ット」のせいで、「本当のことを言う」という語用論的效果が生まれる。そのため、逆に否定的な発話であるの(1 b) は、言いにくい本音を婉曲的に述べたようなニュアンスになる。

文林 四十五号

この「ット」を使って相手を invisible listener として不可視化するのは、皮肉や茶化しなどの対人的に悪い機能ばかりではない。「コンビニに行こうと」は寧ろ、相手への配慮から発話されると考えられるからだ。

まず、この「コンビニに行こうと」が発話される状況を想定してみよう。本当に家に1人でいるときに、コンビニに行きたいと思ったら、黙って財布をにぎって靴をはくのが普通である。このような発話がされる時は、友達と一緒にいる時に、ちょっとコンビニに行くためにその場を抜けるときだろう。そのため、自分の所在を知らせるために述べるのだが、Okamoto (1995) が「くだけた宣言」と述べているように、別の誰の許可を要求しているわけでもない。リーチ (1987: 153) ではポライトネス理論の観点から「一般的に話し手の聞き手に対する働きかけが強く、その結果聞き手の負担が多ければポライトネスは少ない」と述べられている。

つまり、「コンビニに行ってもいいですか」と相手の許可を取る方が、ポライトネスが少なく、「コンビニに行こうと」の方が、ポライトネスが大きいことになる。つまり、対人コミュニケーション上、相手にできるだけ負担を与えないように、「コンビニに行こうと」と相手を不可視化して述べているのである。特に、友達同士でどちらかが許可を与える関係でない時に、「コンビニに行ってもいい?」「トイレに行ってもいい?」と許可を要求するのは逆に相手にとって負担だと考えるのだ。とはいえ、黙っていなくなるのもよくない。自分のことは気にしないでほしいが、何をするのか相手に知っておいてもらった方が双方にとって都合がいいという場合、あえて、「ット」で相手を invisible listener として不可視化するのである。「と思う」についてメイナード (2005) は次のように述べている。

「自分の取った行動の真偽が確定的な事実と断定できない場合や、

引用形式をとった話し言葉のモダリティ

自分の状況に対する把握の仕方が、他人の評価と関わってくる場合（浅野1996：178）には、断りの表現は必要になり、そのような配慮を示すために「と思う」が付加される。

「と思う」と同じように、「ット」を使うことでも相手のへの配慮を表すことができる。

9 「どっこいしょっと」型の表現性

7節で「ット」はその原義である補文マーカーとして機能から、何かを「」（括弧）、つまり補文に入れたような効果があるとする。つまり、ある物事ないし発話の始まりと終わりをマークする役目であるということを7節では述べた。

これはかけ声などについて、物事の始まりと完了を表す用法を生み出す。加藤（2010）の◎認知境界表示用法と言われる例と重なるものである。

また、単なる開始や完了だけではなく、何かをクリアし、区切りをつけるような場合も使用できる。

<開始と完了>

よいっしょと。

どっこいしょっと。

あらよっと。

あばよっと。

そらよっと。

よしと。

文林 四十五号

<何かをクリアし、区切りをつける>

おととと。

おーと。

あぶないっと。

うまいっと。

よっと。

ほいほいっと。

一見、無意識のかけ声についているようであるが、これらは共起制限が強く、生産性が低い。ゴキブリを見たときに「*ぎゃーっと」「*気持ち悪いっと」と言えないことから、かなりはっきりした意味制限がわかるだろう。

そして、これらに invisible listener がいるのかどうかであるが、「どこいしょっと」型の場合、「コンビニに行こうっと」型ほど invisible listener の存在には斟酌していない。ただ、開始や終了のかけ声として使われることが多いことから、それを行うことを決断する自分と、実際に行う自分のように、自分自身を invisible listener に見立てている場合もあるだろう。また、もしも一緒に働いている仲間がいれば、何か重いものを動かしたり、持ち上げるときの合図や注意にもなりうるだろう。誰も聞いていなくても、開始と完了時に何か発話するのは、食事の時に「いただきます」と「ごちそうさま」を言うようなものである。その時、特定の invisible listener を設定するまでもなく、食物を作ってくれた人、料理してくれた人のように多くの関係者、つまり invisible listener を想定することができる。

10 まとめ

最後に冒頭であげた問題をまとめる。

問題1 なぜ、話し手の意志的発話に引用形式の「ッ」が付くのか。

問題2 「ッ」は本当に「ト思」が省略されたものなのか。

問題1は「ッ」は引用形式ではなく、終助詞化したモダリティ表現である。その機能としては不特定で名前のない invisible listener（目に見えない聞き手）へのリアルタイムな発話であるというマーカーである。それはその状況の関係者なら、発話者本人から偶然に通じかかった人も含めて誰でもなることができる。そして、「」括弧付きの発話であるということから、語用論的に開始と完了を表すかけ声的な発話につくことができる。

次に問題2であるが、「ト思」は統語的にも補文をとる引用構文であるため、この時の助詞「ト」は補文マーカーである。そこで、完全に文法化して述語を必要としない「ッ」とは別物とする。

補文マーカーを持つ「ト思」でさえ、メイナード（200：375）にあげられた「子供の反抗期や思春期は、親としてお気になるところだが、我が家ではその点で何か困ることは起こらなかったト思」のように判断保留のモダリティに傾いているものがあることから、「ッ」が完全に終助詞としての用法を確立していても不思議はないだろう。

文林 四十五号

<参考文献>

1. 浅野裕子（1996）『『情報のなわ張り』と日英の文形選択基準---『と思う』を中心に---』『世界の中野日本語教育』6 pp.169-184
2. 小野正樹（2001）「『ト思う』述語文のコミュニケーション機能について」『日本語教育』110号
3. 大島良和（2010）「日本語引用構文における引用述語の省略現象」『茨城大学留学生センター紀要』vol. 8 pp.85-99
4. 加藤陽子（2010）『話し言葉における引用表現 引用標識に注目して』くろしお出版
5. 国立国語研究所（1963）『話し言葉の文型（2）-----独話資料による研究』秀英出版
6. 砂川有里子（1988）「引用文における場の二重性について」『日本語学』7-9 明治書院 pp.14-29
7. 砂川有里子（1989）「引用と話法」北原保雄（編）『講座 日本語と日本語教育』4 明治書院 pp.355-387
8. 高橋陽子（2010）『日本人で知らない・外国人の大疑問』アルク
9. メイナード・k・泉子（1997）『談話分析の可能性---理論・方法・日本語の表現性』くろしお出版
10. メイナード・k・泉子（2005）『談話表現ハンドブック』くろしお出版
11. リーチ G・N（1987）『語用論』、池上義彦・河上誓作訳、紀伊国屋書店
12. Okamoto, Shigeko. 1995. Pragmaticization of Meaning in Some Sentence-Final Particles in Japanese. Essays in Semantics and Pragmatics. Festschrift for Charles Fillmore, ed. by M. Shibatani and S. A. Thompson. Amsterdam: John Benjamins, pp. 219-246.